

生莢用(中熟莢塩ゆで)落花生の栽培法

第2報 早穫り栽培における栽植様式と品種

露重美義・加治屋伸章・*宮下茂樹(鹿児島県農業試験場大隅支場・*元同支場)

Miyoshi TUYUSHIGE, Nobuaki KAJIYA and Shigeki MIYASHITA: Cultivation Techniques of Green Peanut for Boiling with Brine

2. Planting Patterns and Varieties in Early-Season Culture

マルチ+トンネル栽培の、早播限界期における生育は、まだ低温期で気象面より厳しい環境下にあり、減収が予想される。生莢用は完熟した普通穫りより早目の収穫であることから、その対策として密植化が考えられ、栽植様式と併せて適品種について1987~'88年に検討した。

1. 試験方法

立性でトンネル栽培に適すると思われる、ワセダイリュウ('87年のみ)とナカテユタカを用い、第1表に示す栽植様式とした。播種期は'87年が3月18日、'88年は3月4日で、収穫は開花期後ワセダイリュウ60日、ナカテユタカは'87年が65日、'88年は70日目に行った。施肥量ほか耕種法はマルチ標準栽培に準じ、トンネル資材は厚さ0.07mm、幅185cmのポリフィルムを用い被覆した。トンネル内の温度管理は、4月上旬からトンネルの南面裾を上げて換気をはかり、気温上昇に伴い開放割合を高め、5月上中旬には全部除去した。

2. 結果及び考察

生育・開花及び結実には温度の影響が大きいとされているが、開花期は'87年がワセダイリュウ5月3日、ナカテユタカ5月9日、'88年は5月2日で、本誌第50号(第1報)の報告と大差がなく、ほぼ通常年の結果と言える。

栽植様式の違いは初期生育や開花への影響が全くみられず、収穫時において1次分枝数など地上部生育が、密植ほどわずかに劣る程度であった。

食用として可能な上莢・中英の莢数は、個体当たりで

は疎植が多いが、単位面積当たりでは密度の影響が大きく、2条播きでは密植ほど多い。3条播きは個体当たりの有効な占有面積の違いによるものと思われるが、2条播きより優れ、条間の広い方が優れた。

生莢収量は莢数が反映して、ワセダイリュウは3条播きで条間の広い22.5cmが最多収で、2条播き株間15cmも同等であった。ナカテユタカは2条播きより3条播きが多収を示し、3条播きでは条間を広く確保した区が優れた。また、'88年は前年よりやや低収年であったが、3条播き同一条間では株間の狭い20cmが多収を得た。なお、生莢の収量は洗浄後の水切り程度により誤差を生じ易いが、'88年に乾燥して子実を調査した結果、上述の生莢収量と同様な傾向であった。

栽植様式の違いによる品質への影響は、収量に占める綱目の充実した上莢の割合や、生莢一莢重及び上実百粒重に大差がなく、密植による細粒化など品質の低下はみられなかった。

品種間では、ワセダイリュウの開花が5~6日早く、且つ早熟であることから早期収穫が可能で、生莢が珍重される極早穫りには適する。しかしながら、ワセダイリュウの品種特性として、くびれが深く外観品質が見劣りする。また、収穫並びに洗浄時にくびれから切損を生じ易く、品質低下を助長する恐れがある。ナカテユタカは莢殻の充実が良好で収量及び上莢割合が優り、収穫時期はやや遅れるものの適応性は高い。

以上、密植による細粒化など品質への影響もみられな

第1表 栽植様式と生育及び収量(1987年)

品種	畦幅 (cm)	条数	条間 (cm)	株間 (cm)	株数 (株/a)	莖長 (cm)	一次分 枝数 (本/株)	有効莢数		有効一莢重(g)		生莢重(kg/a)			同標 左比 (%)
								(個/株)	(個/m ²)	2粒莢	1粒莢	上莢	中英	計	
ワセダイリュウ	120	2	35.0	24	694	43	6.7	17.7	123	4.5	2.4	39.1	17.6	46.7	84
"	"	"	"	20	833	43	6.2	17.8	148	4.3	2.3	35.5	20.0	55.5	100
"	"	"	"	15	1,111	43	5.9	13.9	155	4.5	2.4	39.9	20.0	59.9	108
"	"	3	22.5	24	1,042	44	6.1	15.6	162	4.3	2.4	37.4	23.2	60.6	109
"	"	"	17.5	"	"	44	6.1	14.7	154	4.4	2.3	36.0	20.8	56.8	102
ナカテユタカ	120	2	35.0	24	694	43	7.2	19.4	135	3.9	2.4	41.5	9.4	50.9	91
"	"	"	"	20	833	43	7.0	18.2	156	3.8	2.3	48.4	7.8	56.2	100
"	"	"	"	15	1,111	42	6.5	16.1	169	3.7	2.3	51.8	9.3	61.1	109
"	"	3	22.5	24	1,042	44	6.9	17.5	183	3.8	2.3	53.8	13.1	66.9	119
"	"	"	17.5	"	"	45	6.8	16.2	200	3.9	2.3	53.2	11.1	64.3	114

注) 上莢:綱目の充実した莢、中英:綱目充実は不十分でも食用に供せる莢

第2表 栽植様式と収量(1988年)

畦幅 (cm)	条数	条間 (cm)	株間 (cm)	株数 (株/a)	収量(kg/a)			同標 左比 (%)	上実 百粒 重(g)
					生莢	乾莢	子実		
120	2	35.0	20	833	44.7	16.9	10.9	100	82.4
"	"	"	15	1,111	47.6	19.0	12.6	116	77.6
"	3	22.5	24	1,042	47.7	20.4	13.6	125	85.9
"	"	"	20	1,250	54.8	21.7	14.5	133	76.9

いことから、栽植株数は2条播きでは株間15cm(1,111株/a)程度まで密度を高められる。3条播きにすると株間24cm(1,042株/a)でも2条播き株間15cmより多収となり、さらに株間20cm(1,250株/a)程度まで可能と考えられる。

品種は極早穫りにはワセダイリュウが適するが、収量性や外観品質の面からナカテユタカの適応性も高い。